無聲の一大瀑布

珠玉の大水晶簾

や嶺上には有名なる氷河あるをや。巖角を繞り氷上を渉り右往左折緩歩徐行、午後一時三十分、始て其頂に達す。時に氣溫を驗すれば、正に三十度を示したり。氷河は曩にセシル嶺上に於て通過せしものと、到底較ぶべくもあらず。仰けば高さ千仞の絶頂より、一分の一以上の急傾斜を成し其表面は厚さ知られぬ氷層を以て覆はる。此の傾斜の稍々緩なる處を通路に擇びて横きるなり。氷層は次第に厚く、遂に斷崖不測の谷底に走る。其幅約二町有餘、宛然無聲の一大瀑布を眼にする如く、耳鳴甚しき予は、既に轟々駢車の響を覺え此無聲の瀑布も猶ほ訇然奔霆の音を發して、跳號碎激、沫を散じて直下谿谷を搖すが如き感ありき。其の壯絶奇絶の觀は、眞に銀河の九天より落ち、澎湃白を噴き素を翻へすと稱すべきなり。

殊に日光の反映は、俄然一大水晶簾を懸け、倏忽紫色の輕綃を布く。既にして或は黄、或は綠、或は青或は紺、或は濃、或は淡、千變萬化、綏々灑々、眞に天下の偉觀たり。予は如何にして之を跋渉すべきかの念は姑く心頭を去り恍惚たるもの稍々久しく、遂に其の吾に復るとき、今まで豁如たりし胸宇は、一變危懼の念を以て滿されぬ。さて如何に之を跋渉すべきか。